Center for Northeast Asian Studies

2021 Spring

巻 頭 言

## 4年間をふりかえって

高倉浩樹(センター長、教授)



2021年3月31日で私のセンター長の任期が満了となる。 今回の巻頭言では、この4年間を振り返ってみたい。

私がセンター長に着任したのは2017年4月であるが、 前センター長であった岡洋樹教授をはじめとして歴代の センター長の尽力もあり、附置研究所ではないが、それに 準ずる組織としての学内の位置づけは比較的安定してい たと思う。

ただ一つ大きな課題があった。東北アジアを対象とする 地域研究を行うのは良いとして、何が研究のコアとなるの か?明示できないことであった。所内の複数の教員がチー ムを作って行う大型プロジェクトの実施と言い換えてもい い。これは10年ぐらい前から大学執行部から出されていた 課題であったが、十分に解答できていなかったと思う。

東北アジア研究センターの良いところは、研究内容につ いては東北アジア研究であればなんでもOKという自由と 寛容さであると個人的には感じてきた。私自身、この職場 に奉職したのが2000年10月である。それ以来、私は自分 の関心に応じて様々な研究をしてきた。当初はロシアの 民族問題に関わる政治社会学研究、比較牧畜研究、ついで 映像人類学、そして文理融合型の気候変動研究、さらに東 日本大震災後は震災とレジリアンス研究、最近は記録をめ ぐるメディア研究といった具合である。それはまさに研 究者を「放し飼い」してくれているが故にできたことだと 感じている。

ただセンター長になると、確かに研究の核を設けないと 組織としてアピールすることが難しいなあと感じるように なった。このことは岡前センター長とも様々な形で意見 を交換する機会があった。具体的には現在、東北大学のプ ロジェクトである「社会にインパクトある研究」に東北ア ジア研究センターとして関わるときの話し合いだった。当 時の理事からは、「隣国理解」にどう寄与するかという観点 から研究事業を考えてくださいという宿題が出された。岡 先生や当時このプロジェクトに関わってもらった内藤寛 子助教とも相談しながら、センターの教員の間で合意した のは、「人類史的なタイムスケールによる地域理解」「大 国の統治と民族的多様性からみる地域」「越境する多様な 問題の理解と共有 | をセンターの研究の三本柱とすること である。二番目は人文学と社会科学の協働であるが、それ 以外は文理融合で実践することである。これ以来、センター 内の様々な研究はこの柱のどこかに位置づけることがで き、そこから分野間の協力もみえてくるようになった。

この4年間の分野横断的な協働を支えたのは、様々な先 生方の尽力による大型・中型の外部プロジェクトである。 人間文化研究機構の地域研究事業(2016-2022)、同機構 の歴史文化資料の大学・共同利用機関ネットワーク事業 (2018-2022)、文科省補助事業の北極域研究事業 (2016-2020; 2020-2025)、国際的にはデンマーク科学高等教育 庁国際連携事業(2018)、日英社会科学交流助成金(2019)、 EUの ERC 事業 (2019) などが走り出し、学内にあっても 指定国立大学災害科学世界トップレベル研究拠点(2017-2022)や知のフォーラム事業 (2018; 2022)、新領域創成 のための挑戦的研究デュオ (2019-2024) などが採択され た。いずれも文理融合型の地域研究の強みを発信できる ものである。これらの事業をどう継続させていくかという ことが今後の課題であろう。また理系ベースの事業に文 系研究者が加わるチーム作りも必要だと思う。

文系基軸の研究所型組織としては査読論文同様に学術 図書刊行が重要である。最近はオープンアクセス論文刊 行支援に加えて、海外学術出版社からも刊行できる仕組み を整えた。また女性・外国人研究者の確保に努めた。一方、 センターの国際化の一環として、外国人研究員の国際公募 制を開始したが、スタート直前でコロナ禍故に中断(延期) せざるを得なかった。文理を問わずフィールドワークが センターの特徴であるがゆえに現在それが滞ってしまっ ているのが気になっている。フィールド科学に変わる調 査法の探求も重要だが、やはりフィールドの現場で分かる 醍醐味が我々の組織を活性化させる鍵だと考えている。

contents



- 1 巻頭言
- 2 私の東北アジア研究
- 3 最近の研究会・シンポジウム報告
- 5 著書・論文紹介
- 7 新任ごあいさつ・コラム
- 8 活動風景

# 私の東北アジア研究

## 古文書から見る江戸時代の大火と気候変動

井上瑠菜

上廣歷史資料学研究部門/学術研究員



## 江戸時代を対象とした

#### 大火研究

私は、安田容子氏(本学災害科学国際研究所)・峠嘉哉氏(同工学研究科)とともに、江戸時代の大火に関する研究に取り組んでいる。これは2019年度の東北大学若手アンサンブルグラント採択課題として始まり、現在も個人研究として継続しているものである。

当時の火災は、暖房のための火気使用や様々な動機による放火など、人為的な着火を原因とするものが多いと考えられているが、乾燥・強風の気象発件では、火種が制御できる規模を超足を発生したが強程(火災の発生)、発生したが強力を過程(火災の発生)、の理解も必じない。自然災害としての理解もが呼ばるため、自然災害としての理解もが呼ばるため、自然災害としての取りあど呼ばるため、自然災害としての理解もが呼ばるため、とくにこの時代を取りあど呼ばれ世界的に気温が低い時代である。とくに立ては歴史資料にはである。とくに立ては歴史資料にはである。とないることから、気象条件に追究できる可能性が高いためである。

本研究は、江戸時代の災害記録を精査して大火の発生数・規模を時期・地域ごとにまとめ、その傾向を文系(歴史学)・理系(水文気象学)双方からのアプローチによって分析する。私はそのなかで歴史資料の収集と分析を安田氏とともに担当している。

#### 宝永4・5年の大火

仙台藩を対象とした安田氏の調査では、『仙台藩歴史事典』に掲載された主要大火一覧をもとに元和5年(1620)から慶応3年(1867)までの約250年間における大火の季節変化を確認した。とくに仙台城下では、宝永4年(1707)2月13日と20日には連続火災、宝永5年(1708)閏1月24日には城下のほとんどを焼失する火災の発

生があった。そのほかこの両年の春先には、京都や熊本でも同様に大火が生じた記述がみられた(『仙台市史通史編5近世3』、『日本災変通志』、『新熊本市史通史編第3巻』)。

## 盛岡藩『雑書』を活用した

#### 火災事例調査

一方で、私は盛岡藩の家老 席日記『雑書』の分析を進め ている。『雑書』は盛岡藩領 内の各種情報を記録したもの (1644~1840年)で、内容 には火災の情報も含まれて火 る。『雑書』に記録された火災 被害の規模はさまざまだが、 日付・天候・風向き・出火場所・ 焼失家数・被害者人数なため、 当時の火災状況を知ることが できる。安田氏の調査と連動

して、宝永4・5年を分析対象とした。 対象期間中の全火災事例についての詳細な記録収集を行ったところ、とくに 宝永4年は4月に火災が多かった。主 な火災発生地域は、城下町で家屋が密 集していた二戸のほか、沿岸部に位置 する宮古や田名部であった。資料を読 み解いていくことで、この時期の東北 地方のなかでも太平洋側において同時 多発的に火災が発生していることが判 明したのである。

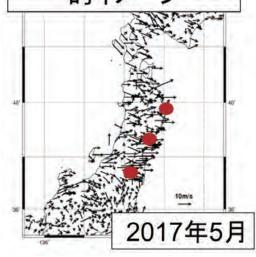
#### 東北東部の同時多発火災

#### - 「宝永風」の実態解明-

峠氏によれば、東北地方の太平洋側 は現代でも林野火災の多い地域であ り、乾燥する春季(3~5月)に多発

いのうえ・るな 宮城学院女子大学大学院人文科学研究科 人間文化学専攻修了。東根市公益文化施設まなびあテラス 市民活動支援センタースタッフを経て現職。専門は日本美 術史。

# 「宝永風」の水文学 的イメージ



東北北部の広域フェーン時の風向分布と火災発生地点(峠ら(2018) を元に修正)

する傾向にある (図参照)。南北に連 なる奥羽山脈の影響で、土壌の乾燥や フェーン現象など火災を増加・強化さ せる気象要因は当該地域で共通してい る。江戸時代の『雑書』でも、事例に よっては西大風の記述があり、フェー ン現象の影響が示唆される。本研究で はこの時期に火災が特に多かった背景 のひとつに強風があると考え、これを 「宝永風」と名付けた。宝永4年は10 月4日に南海トラフを震源とした大地 震大津波が発生し、翌月23日に富士 山の宝永大噴火があった特殊な時期と 考えられる。現代と江戸時代の火災を 比較・検討することにより、その特殊 性をより具体的に把握できるのではな いだろうか。

本研究が現在も起こる自然災害との 関わり方や防災を考える一助となるよ う、引き続き資料の調査分析に取り組 んでいきたい。 REPORT

# 現地調査と展示会の報告

北海道立北方民族博物館 ロビー展

## 石の知る辺~アメリカ・ニューヨーク州ロングアイランド、 先住民シネコックに鯨の物語をたずねて



是恒さくら (災害人文学研究ユニット/学術研究員)

メリカのアラスカ州で暮らした 頃、アラスカ先住民の知人が「日 本人だから鯨肉が好きでしょ

う?」と、発酵させた鯨肉と脂身をわけ てくれた。彼女の故郷の海辺の村で獲れ た鯨だった。その共食の体験は、遠く離 れた国にも近しい文化をわかちあう人た ちがいることを思い出させてくれる。

ある文化のなかで正しいとされること が、他の文化では受け入れられない場面 に出会うことは多々ある。捕鯨問題はそ の筆頭だ。「日本では鯨を食べるなんて 残酷だ」と、誰かに面と向かって言われ る時、何を思うだろう。鯨食は日本の伝 統文化だから、鯨だって牛や豚と変わら ない動物だから、否定されることじゃな いはずだ――日本で生まれ育つと、その ように感じる人も多いようだ。ヨーロッ パと日本、アメリカと日本、世界と日本。 捕鯨に反対する集団と捕鯨を続ける集 団の二項対立ばかりがメディアを騒がせ る。しかしその内側で生活を営むひとり ひとりの物語に耳を傾けると、分断され た文化と文化の境目が混じりあい、結び ついていくことに気づかされる。

2015年に東北で暮らし始めてから、私 は捕鯨や鯨猟がおこなわれてきた土地、鯨 にまつわる文化や信仰を持つ国内外の土



リトルプレス『ありふれたくじら』の最新号、シネコッ クと鯨の話をまとめた小冊子と挿絵の原画刺繍。

地を訪れ、鯨と出逢った人たちの体験談や 語り継がれてきた物語を聞き集めている。 捕鯨船の元船長、鯨の解体士、鯨に捧げ る歌の歌い手、漂着した鯨に祈りを捧げ る人たち。捕鯨問題の対立が世界にもた らしたほころびを繕うように、ばらばら になった鯨の物語を縫いあわせ、刺繍を 添えた小冊子を編み続けている。リトル プレス『ありふれたくじら』というシリー ズの小冊子だ。

『ありふれたくじら』を編みながら、 さまざまな土地を訪れた。宮城県石巻市 の牡鹿半島、気仙沼市の唐桑半島、和歌 山県東牟婁郡太地町、北海道網走市、ア ラスカ州の先住民の村ポイント・ホープ。 そこで出会った人々の語りはやがて絡ま りあい、次の行き先へと導いてくれた。

> 2019年の3月と9月、 私はアメリカ・ニューヨー ク州ロングアイランドにあ る、シネコック・インディ アン・ネーションを訪れた。 2016年に訪れたアラスカ 州の知人が、「ニューヨー ク州にも鯨とかかわりのあ るネイティブ・アメリカン がいるそうだ」と教えてく れたことがきっかけだっ た。「シネコック」とは「石 の多い浜の人々」という意

開催日 2021年1月5日~1月24日

会場 北海道立北方民族博物館 ロビー

味だという。ロングアイランドの浜辺は、 場所によってさまざまな表情を見せる。 美しい白い砂浜、静かな石の多い浜、ガ ラスのように透明な小石や、色とりどり の小石でいっぱいの浜もある。

シネコック・インディアン・ネーショ ンの一員であるシェーン・ウィークスと、 ロングアイランドを巡った。この島の歴 史は、あちこちに石碑として残されてい る。シェーンは、そうした石碑やあまつ さえ地図にも記されていない場所へ案内 してくれた。石の矢じりが見つかる岸辺、 鯨が見える浜、アザラシが魚を食べに来 る港。先住民の埋葬地、かつて村があっ た場所、魚を捕るためのキャンプがあっ た場所。丘の上の土地、小川の近くや湾 の中など、それぞれの目的に適した場所 が選ばれたことが、今でもわかる。土地 の古い名前とそこにあった物語を知る と、風景は知らなかった姿を見せる。物 語は、誰かの眼差しで世界を見る窓であ り、時を超えるものでもある。

この島と、人々と、鯨はどのような物 語を編んできたのだろう。そう考えなが ら歩き、綴り、縫い取ったロングアイラ ンドへの旅を、展覧会「石の知る辺~ア メリカ・ニューヨーク州ロングアイラン ド、先住民シネコックに鯨の物語をたず ねて」では、写真・本・刺繍によってふ りかえった。



北海道立北方民族博物館ロビーの展示風景



ロングアイランドで撮りためた写真。関連する場面を 3枚一組として展示した。

REPORT

# 最近の石开究会・シンポッツム報告

講演会

## 清代モンゴル史研究の最前線



堀内香里 (情報拠点分野/学術研究員)

開催日 2020年12月5日

会場 オンライン開催

新

型コロナウイルスによってモンゴルでの現地調査ができない状況が続いている。本講演会

は現在のモンゴルにおける最新の研究情報を提供し、国際的な学術交流を行うことを目指して開いたものである。発表はいずれもモンゴル語で、それを日本語に逐次通訳する形で進められた。講演内容は次の3つである。

一つ目はモンゴル国立大学の O. オユンジャルガル氏の「『欽定平定準噶爾方略』のモンゴル訳について」である。『欽定平定準噶爾方略』とは清朝がジュンガルを征服するまでの記録で、皇帝の指示によって編集された史料である。オユンジャルガル氏はこのモンゴル語訳を

行ってきた。その作業の過程で明らかと なった知見を発表された。

二つ目はモンゴル国立中央公文書館の Z. ニンジバダガル氏の「清朝期ジェプツンダンバ・ホトクトの属民シャビの行政構造:エルデネ・シャンゾドバ衙門を事例に」である。エルデネ・シャンゾドバ衙門がジェブツンダンバ活仏の属民をどのように管理していたのかについては、清朝政府が編纂した中央史料からは見えてこない。本講演では現地アーカイブ史料から明らかとなった、その管理構造について発表された。

三つ目はモンゴル国立科学アカデミー 歴史研究所の B. ナツァグドルジ氏の「ヘ セグ・バイシン石碑の拓本の読解及び 16-17世紀モンゴル史に関するいくつかの課題について」である。これまで紛失したとされてきた同石碑の拓本が見つかった。それを読み解いた結果、16-17

世るののす見べこれにン族団通さでがらいた関はるるされた。



講演会ポスター

研究会

# 「18世紀および 19世紀のサハリン・千島アイヌの歴史民族学的研究」第1回研究会



遠藤スサンネ

(ロシア・シベリア研究分野/兼務教員:高度教養教育・学生支援機構講師)

開催日 2020年12月19日

会場 オンライン開催

T18

世紀および19世紀のサハリン・ 千島アイヌの歴史民族学的研 究」は、2020年度から「東北

アジア研究センター共同研究」の枠で開



研究会ポスター

始した共同研究である。本研究の目的は、日本の北辺(北海道、千島、サハリン)と周辺地域(沿海州、カムチャツカ半島)を一つの領域として設定し、18世紀と19世紀の時期を対象として、特に日本とロシアの狭間に置かれたサハリンアイヌと千島アイヌの歴史的発展に焦点を当て、その実態を多様な視点(歴史、民族、美術)から究明することにある。本共同研究の第1回研究会は2020年12月19日にオンラインで開催され、二つの研究報告が行われた。二名の報告者のうち、松本あづさ氏(藤女子大学)は、「アイヌの千島交易と松前藩一村上島之允『蝦

夷島奇観』の「ニヨエン」図をめぐって一」というテーマで、松前藩とアイヌとの軽物交易と「ニヨエン」図との関わりについて報告を行った。続く井上瑠菜氏(東北アジア研究センター)は、「アイヌを描く画人たち一蠣崎波響筆《夷酋列像》に見られる「かたち」の継承一」というテーマで、アイヌ指導者12人を描いた《夷酋列像》の制作背景について報告を行った。二つの報告に対しては、共同研究のメンバーによる質疑応答が活発に行われ、有益な情報交換の場となった。

#### 研究交流会

## 新型感染症の流行がマイノリティグループに与える影響



滕媛媛 (情報拠点分野/助教)

開催日 2021年1月9日

会場 オンライン開催

型コロナウイルスの流行は、 人々の生活に多大な影響を与

えている。この中で、脆弱性の 高いマイノリティグループや社会的弱 者は、より大きな影響を受ける恐れがあ る。また、その脆弱性は、個人、集団、 そしてコンテキストにより異なるため、 画一的な支援策の有用性が低いと考え られる。故に、各グループが受けた影響 の把握、評価、モニタリングが重要にな る。そこで、新型コロナウイルスの感染 拡大がマイノリティグループの生活に 与える影響を調査し、ウィズコロナ時代 における地域共生社会に向けた包括的 支援の在り方を模索することを目的と した共同研究「新型感染症の発生がもた

らす社会的格差の拡大:マイノリティグ ループに着目して」を始めた。

今回の研究交流会では、特に、子育て 世帯と在日中国人労働者に着目し、若手 研究者が分析結果を報告したうえで、行 政や関連 NPO 等の視点から現場で生じ ている問題等を紹介していただいた。報 告の部では、中山愛子氏(経済学研究科) から「未就学児を持つ子育て世帯の生活 環境へ及ぼす新型感染症流行の影響」、 滕から「新型感染症の流行における在日 中国人労働者の脆弱性」という題で報告 を行った。討論の部では、研究者のほか、 行政、NPO、企業など、様々な背景を もつ参加者が多角的な議論を行った。マ イノリティグループの支援に関する課 題のほか、格差の発生形態・条件、自 助・共助の可能性、支援策のコストベネ フィット評価などについて、活発かつ有

意義な意 見交換が できた。



研究交流会のポスター

BOOKS 著書・論文紹介

RECENT PUBLICATIONS



## 近世東北の温泉史料 ─鎌先温泉一條家文書を読む─

#### 荒武賢一朗 編著

東北アジア研究センター報告 25 号 2020 年 12 月刊

text: 荒武賢一朗

東北地方には古くから「名湯」と呼ばれる温泉がたくさんあり、人々の医療・ 生活・行楽を支えてきた。そこにはもちろん歴史が存在する。本書は、近世初 期から現在まで鎌先温泉(現宮城県白石市)の経営を続けている一條家の歴史 資料調査の記録である。一條家文書については、2017年秋から東北アジア研 究センター上廣歴史資料学研究部門と白石市教育委員会が共同で整理作業を 進めてきた。江戸時代には、ガイドブックにあたる「温泉案内」が多数出版され、 当時の様子や趣向・関心をみることができる。しかし、温泉をめぐる社会の実 態解明には経営者側の論理を知る必要があり、一條家文書を読み解くことによ り人々の営みを復元したいと考えている。今回掲載した原文翻刻では、一條家 が仙台藩の湯守(ゆもり)として鎌先温泉を運営する経緯や、温泉および周辺地 域の経済状況、さらには遠方からも入湯客が訪れる魅力を持った効能について も紹介した。また、一條家の当主が偶然に遭遇した1819年の白石城焼失の記 録も貴重な歴史資料である。いずれも新たな史実を提供し、さまざまな分野で 活用が期待される。なお、本書はウェブサイトで全文ダウンロードができるので、 関心のある方にはぜひ御覧いただきたい。

参考URL:上廣歷史資料学研究部門

https://uehiro-tohoku.net/works/2020/2346.html





## 中国の国内移動

一内なる他者との邂逅

川口幸大、堀江未央 編著

京都大学学術出版会 2020年12月刊

text: 稲澤努

本書は、東北アジア研究センター共同研究「移動と流行:移民がもたらしたもの/持ち帰ったもの」をはじめとする若手・中堅の研究者をメンバーとした複数の共同研究の成果である。2億人を越えると言われる中国国内の流動人口に着目し、移動する人々が新たな地でいかに暮らし、その経験を故郷へどう持ち帰ったのか、また一方でホスト社会の人々は流入者たちにどう接し、何を拒み何を受け入れてきたのかを記述・分析したものである。広大な国土に多様な文化的特色を持つ人々が暮らす中国での人の移動は、戸籍制度などの諸政策の影響もあって、国内移動でありながら「境界越しの」移動と指摘できる面がある。

本書は、川口幸大・堀江未央による序章「国内移動をいま論じる意味―中国と日本」のあと、第 I 部 移動が生んだコンタクト・ゾーンにおける社会関係とはいかなるものか、第 II 部 移動は何を広め流行らせているのか、第 II 部 移動によってエスニシティと他者像はいかに再編されているのか、の三部からなり、終章は堀江未央による「『境界越しの邂逅』の持つ可能性」である。8 名の執筆者はいずれも中国でのフィールドワーク経験をもつ人類学者であり、本書は内なる他者との邂逅が現代中国社会にもたらしたものを人類学的な視野の元に考察した民族誌的論集となっている。



## 災害ドキュメンタリー映画の扉: 東日本大震災の記憶と 記録の共有をめぐって

是恒さくら、高倉浩樹 編

新泉社 2021年1月刊

text: 是恒さくら

東日本大震災に関するドキュメンタリー映画は数多く 制作・発表されてきた。デジタルカメラやカメラ付き携 帯電話が一般的になった時代を象徴するように、東日本 大震災は多くの人の手により記録された。映画・映像作 品の作り手たちも、東日本大震災の発生直後からカメラ を手に被災地を訪れた。「今起きていることを記録し伝え なければ」という信念に駆り立てられたという。一方、 ボランティア活動等を通して被災地に通う、または現地 で暮らしながら被災地と人々に向き合い、何年もの時を 経て伝えるべき物語を紡ぎ、映画・映像作品の制作に取 り組んだ作り手たちもいた。東日本大震災の発生以降の できごとを見つめてきた様々な作り手たちの眼差しが作 品として昇華したドキュメンタリー映画・映像作品には、 記憶の継承や未来の災害を防ぐ防災意識の向上にも寄与 する力があるだろう。そうした作品から、何を受け取り、 何を受け渡してゆけるだろうか。災害人文学研究ユニッ トでは2018年から2019年にかけて、ドキュメンタリー 映画の上映会と映画の内容に関する分野の研究者を招い た意見交換会を開催してきた。本書はその「災害人文学 研究会」の取り組みの記録である。本書をきっかけに、 災害の経験や記憶と向き合い未来へ歩んでいく道程に、 映画・映像の力が活かされていくことを願っている。



山口睦

学術交流分野/准教授 (クロスアポイントメント: 山口大学)

やまぐち・むつみ ▶本属は山口大 学人文学部准教授。専門は文化人 類学、主なフィールドは日本。研究 テーマは近現代日本社会の贈与交 換 災害支援など。

## 長州の地からごあいさつ

2020年11月からクロスアポイントメント制度により着任いたしました山口睦と申します。「新任ごあいさつ」という機会をいただきまして、ありがとうございます。本務校は山口大学人文学部であり、2017年4月から勤めておりますが、その前2年間は、研究支援者として東北アジア研究センターにお世話になっておりました。新型と関を合わせる機会もなく今年度が終わろうとして、大変失礼しております。

私の専門は文化人類学ですが、東日本大震災以降は災害支援を贈与論の観点から調査、研究してきました。みなさまもご存じの通り、震災以後、被災地には多くの資金が投入され、物的支

援、人的支援が行われてきました。私 が扱う贈与論では、災害支援の中でも 個人的に関係のない被災者に見返りを 期待しないで贈与を行う、公的贈与を 主な対象にしています。また、単にモ ノや資金が一方的に移動するだけでは なく、支援する側とされる側の交流、 何らかの社会関係が築かれるのではな いか、という点に着目して研究を行っ ています。

本来であれば、仙台に移動して勤務 することが求められるわけですが、コロナ禍ということで、昨秋以来、災害 人文学ユニットのオンライン研究会に 参加させていただいております。事態 が収束してみなさまに直接ごあいさつ できる日を楽しみにしております。

コラム COLUMN

## ロシアで感じる「包囲」と「挑発」

柳田賢二(モンゴル・中央アジア研究分野/准教授、全学教育ロシア語担当教員)



2020年11月末にロシア人の友人 X 氏からメールが届いた。経済苦のほか、約30年ぶりに再燃したナゴルノカラバフ紛争において、NATO 加盟国トルコの介入ゆえに、ロシアが親露国アルメニアを切り捨てる形でアゼルバイジャンと停戦させるほかなかったこと、親露国ベラルーシの大統領選をめぐる騒乱、モルドバ(Moldova)での親ルーマニア政権発足による沿ドニエストル紛争再燃の懸念、といった戦争への不安を訴える悲鳴のような内容であった。トルコのエルドアン大統領は汎チュルク主義者であり、中央アジアへの回廊を確保するために今回の介入に打って出たというのである。X 氏によると、トルコの強国化には中国の欧州進出の妨げになるという利点があり、英国の政治家はこれを歓迎しているという。確かに、EU も米国もトルコのこの暴挙を非難していない。

ウクライナの西、モルドバの東部にある未承認国家沿ドニエストル共和国では、1992年、ロシアのレベチ将軍による武力を背景にした停戦がなければルーマニア系モルドバ人によるロシア人大量虐殺があり得たという話を、筆者とX氏は沿ドニエストル軍人としてこの戦闘に参加したロシア人から聞いている。

NATOの一角を成すバルト三国の行政権力による「言語警察」や立法による就職妨害といったロシア人差別について、ロシアのメディアはほとんど報道しない。非民主的なプーチン政権は事実上メディアをコントロールしているが、NATOと直接戦端を開く契機となるようなプロパガンダは行わないのである。こうした事情を知った上で客観的に見ると、国内に多数の米軍基地を擁する日本を含む西側がロシアを包囲し、あちこちでロシアを挑発しているとしか言いようがない。そして、ロシア人は実際に「包囲」や「挑発」を感じている。

現在のロシア庶民の反プーチン感情と排外感情は、いずれも原油安と西側による経済制裁に端を発する生活苦に由来するのであり、反プーチンと反西側は、文字通りの表裏一体なのである。

最近の我が国の大学では、またもや初修外国語を縮小する動きが現れつつある。ロシア語やドイツ語を知る日本人を減らすということは、とりもなおさず、上述のような国際情勢の存在を知らぬ日本人を増やすことである。それでよいのだろうか。

vol. 88

## 歴史資料から「ふつうの人びと」を可視化する 一 社会史研究と人文情報学 —

#### 磯貝真澄 (ロシア・シベリア研究分野 助教)





歴史研究者の仕事の基本は、歴史資 料から得られる情報を文章で、学術論 文または学術書にまとめることである。 しかし、論文であれ、書籍であれ、史 料からみえてくる多くの「ふつうの人 びと」のさまざまな営みを可視化する のに、文章では限界があると感じるこ とも少なくない。地図や図表を援用す る場合でも同じである。学術書ではな く一般向けの書籍として、物語のよう に記述すればよいと思われるかもしれ ないが、それでは正確さを欠くとみ なされる恐れがあるし、国際学界や 研究対象地 ――筆者の場合は、ロシア である――に対して公開することがで きない。研究成果は、むしろフィール ドの人びとにこそ還元したい。

筆者はロシアのヴォルガ中流域やウラル南麓のムスリム社会の歴史を研究しており、分析中の史料に、19世紀末~20世紀初頭に著されたウラマー人名録がある。ウラマー人名録とは、歴史的に中東ムスリム地域で書かれるようになった文献ジャンルで、ウラマー(イスラーム法学者、知識人)の活動

や業績を記録した伝記記事の集成であ る。伝記集、人名辞典ともいわれるも のであり、それを近代ロシアのムスリ ムも書いたのである。筆者が研究する ウラマー人名録(リザエッディン・ブ ン・ファフレッディンというウラマー の著作『事績』) には、17世紀末~19 世紀後半のこの地域のウラマー約 450 名について、名や出自、死亡年や埋葬 地、生涯で主に務めた職、師匠の名を 中心とする学問歴、教授歴と弟子の名、 妻や子の名等々が記述されている。師 弟関係は特に詳しく書かれる。そして、 ウラマーは、中東や中央アジアであれ、 ロシアであれ、優れた師匠を求めて遊 学したため、そうした記録は彼らの移 動についての情報でもあるのだ。

この史料をもとに筆者は、歴史的なロシアのウラマー社会における人的・地理的ネットワークについて学術論文をまとめた。とはいえ、たかだか32,000字の論文である。ウラマー



10 名強の師弟関係と、1 名が移動しながら4名の師匠についたことの記録を、事例として示すことしかできなかった。手もとの史料の中には、それよりはるかに豊かな、ふつうの人びと(知識層とはいえ)の世界がある。これを何とかして可視化したい。社会史研究を主張するならば、そのための努力は必要ではないか。

現在、筆者は人文情報学に関心を 持っている。これまで述べたような問 題は、情報学を援用すれば解決に近づ くのではと期待するためである。たと えば、ウラマー450名の移動の様子は、 GIS(地理情報システム)の利用で可 視化できそうである。ただ、歴史研究 であるため、そこに時間情報を載せた い。また、可能であれば、たとえば村 A から村 B への移動を直線で結ぶの ではなく、歴史的な街道の情報を載せ、 それによって推測される経路と距離を 可視化したい。そもそも史料のテクス トはアラビア文字で書かれたテュルク 語で、いわゆる正書法がなく、その現 代語であるタタール語はキリル文字表 記で、語彙も相当に異なる。そのよう な歴史的文章語で書かれたテクストへ のタグ付けは、どのようにすればよい のか。かなり挑戦的で、オープンサイ エンスの潮流にも乗るものだが、すこ ぶる地味な研究構想である。

#### 編集後記

2020年度は週4~5コマもリアルタイムのオンライン授業を行った。IT機器やアプリは人間並みにむら気であり、双方向授業の教師とオペレーターの一人二役を続けるストレスは表現し難い。学生の孤独とストレスも、また社会経済の危機もよく分かる。しかし感情で動いてはならない。現に、筆者も学生もコロナに感染していない。これを最後の「忍耐の春」としたい。(柳田賢二)



東北アジア研究センターは、文理連携・学際的なアプローチによって、シベリア・モンゴル・中国・朝鮮半島・日本における歴史・社会・自然を総合的に捉えることをその使命とする研究所型組織です。

東北大学東北アジア研究センター ニューズレター 第88号

2021年3月26日発行

編集:東北アジア研究センター広報情報委員会 発行:東北大学東北アジア研究センター 〒 980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41 TEL 022-795-6009 FAX 022-795-6010







<sup>1: 『</sup>事績』第7巻(ロシア·オレンブルグ、1904年)の 表紙

<sup>2:</sup> 墓碑銘も社会史資料の1つ(ロシア・ウファ近郊にて、2019年9月)